# The Ballad on Jazz Piano Trio

ザ・バラード～ジャズ・ピアノ・トリオ

1. 星に願いを／デヴィッド・ヘイゼルタイン・トリオ
When You Wish Upon A Star《L. Harline》(7:22)

2. エブリタイム・ウィ・セイ・グッバイ／ニューヨーク・トリオ
Everytime We Say Goodbye《C. Porter》(6:42)

3. ポルカ・ドッツ・アンド・ムーンビームス／エディ・ヒギンズ・トリオ
Polka Dots And Moonbeams《J. V. Heusen》(7:53)

4. スリーピン・ビー／サー・ローランド・ハナ・トリオ
A Sleepin' Bee《H. Arlen》(4:42)

5. マイ・ファニー・バレンタイン／スティーブ・キューン・トリオ
My Funny Valentine《R. Rodgers》(6:03)

6. メランコリー・ベイビー／ロマンティック・ジャズ・トリオ
My Melancholy Baby《E. Burnett》(6:39)

7. ヌアージュ／ロブ・アフルベーク・トリオ
Nuages《D. Reinhardt》(3:23)

8. クライ・ミー・ア・リバー／ジョン・ヒックス・トリオ
Cry Me A River《A. Hamilton》(7:55)

9. スター・クロスト・ラバーズ／クロード・ウィリアムソン・トリオ
Star Crossed Lovers《D. Ellington》(4:38)

10. 恋におちた時／リチャード・ワイアンズ・トリオ
When I Fall In Love《V. Young》(6:07)

11. アンジェラ／ステファノ・ボラーニ・トリオ
Angela《A. C. Jobim》(4:31)

12. イット・オンリー・ハーツ・ホエン・アイ・スマイル／ハロルド・メイバーン・トリオ
It Only Hurts When I Smile《H. Mabern》(6:07)

℗©2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

PProduced by Tetsuo Hara
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound
Front Cover Photo : © The Estate of Jeanloup Sieff / G.I.P. Tokyo.
Designed by Taz.

ジャズ・ミュージシャンにとって、生涯をかけて追求するテーマのひとつになっているのがバラードだ。どれほどのテクニックがあろうと、いかに斬新な音楽性を持っていようと、バラードが満足に演奏できないなら優れたアーティストとは言えない。バラードでは表現力が強く要求される。とは言っても、難しく考える必要はまったくない。

バラードは心を安らげる最高の妙薬だ。とくにバラードが心に沁み込んでくるのは、ひとりぼっちで過ごす夜や、恋人と素敵な時間を共有しているときだろう。そんなときに打ってつけの1枚がこのCDだ。

ジャズ・バラードの奏法を確立したのは、テナー奏者のコールマン・ホーキンスだと言われている。ジャズ史における最初のバラード演奏と呼ばれているのが、1939年に彼がRCAに吹き込んだ「ボディ＆ソウル」だ。もちろんそれ以前にもバラードと思われる演奏や歌は記録されていた。しかしそれらの大半はテンポだけがゆったりとしたもので、いわゆるバラード奏法やバラード唱法とは違うものだった。

それだけに、今日に通ずるバラードのスタイルを提示してみせたホーキンスの「ボディ＆ソウル」は画期的な内容と言えるものだ。そしてこれがきっかけで、バラードは多くのミュージシャンやシンガーが必ず取り上げる重要なレパートリーになった。

スイング・ジャズという言葉があるように、“ジャズはスイングするもの”といった認識が一般的だ。デューク・エリントンの「スイングしなけりゃ意味ないね」という曲も有名である。一方で、ジャズはバラードによって多くのひとの心を掴んできた。

スインギーで豪快なジャズも悪くない。しかし、じっくりと音楽に耳を傾けてみたいときはバラードを聴くに限る。気持ちをリラックスさせるにはバラードが一番だ。慌ただしい1日が終わり、落ちついた気分になったらバラードを聴く。そうして心身をリフレッシュさせる。

このアルバムには、そんな効用のある美しい曲が一杯詰まっている。そのまま穏やかな眠りにつけること請け合いのバラードに身を任せて、明日はどんな1日になるのか、思いを馳せてみるのも悪くない。

■演奏紹介

1. 星に願いを（デヴィッド・ヘイゼルタイン・トリオ）

ウォルト・ディズニーは1937年に長編アニメ映画の1作目として『白雪姫』を大ヒットさせ、3年後に2作目の『ピノキオ』を発表した。これは、その主題歌として劇中でジミーこおろぎ（声はヴォードビル・シンガーのクリフ・エドワーズの吹き替え）が歌ったナンバーである。ネッド・ワシントン（作詞）とリー・ハーライン（作曲）は、この曲で同年度の「アカデミー主題歌賞」に輝く。デヴィッド・ヘイゼルタインは持ち前の叙情味に溢れたタッチで、この曲をロマンティクに奏でてみせる。

2. エヴリタイム・ウィ・セイ・グッバイ（ニューヨーク・トリオ）

1944年にニューヨークで上演されたレビュー『セヴン・ライヴリー・アーツ』の挿入歌としてコール・ポーターが作詞・作曲したバラード。“いつもお別れを言うたびに涙が溢れ出てしまう”と別れの辛さを歌ったポーター得意のテーマによる内容がヒットに繋がった。ピアニストのビル・チャーラップを中心にしたニューヨーク・トリオが、それをしっとりと歌い上げる。囁きかけるように、呟くように、彼のピアノがメロディを綴っていく。ちょっと気だるさを感じさせるタッチも雰囲気に合っている。

3. ポルカ・ドッツ・アンド・ムーンビームス（エディ・ヒギンズ・トリオ）

ジョニー・バーク（作詞）とジミー・ヴァン・ヒューゼン（作曲）がフランク・シナトラのために書き下ろしたバラード。トミー・ドーシー楽団の専属シンガーだった彼が、1940年に同楽団と吹き込んだレコードで大ヒットを放つ。シンガー以外ではピアニストが好んで取り上げる1曲としても知られており、代表的な演奏に数えられるのが、バド・パウエル（ブルーノート）、ビル・エヴァンス（リバーサイド）クロード・ウィリアムソン（ベツレヘム）などによるものだ。エディ・ヒギンズのヴァージョンはソロ・ピアノから始まり、やがて穏やかなリズムが加わってしっとりとした演奏へと流れていく。

4. スリーピン・ビー（サー・ローランド・ハナ・トリオ）

オードリー・ヘップバーンの人気映画『ティファニーで朝食を』の作者であるトルーマン・カポーティ（作詞）がハロルド・アーレン（作曲）と組んで、パール・ベイリー、ダイアン・キャロル主演のミュージカル『ハウス・オブ・フラワーズ』のナンバーとして発表した1曲。アーレンはこの曲を『スタア誕生』で使うつもりだったが、予定を変更しこのミュージカルにフィーチャーして大ヒットを記録した。瀟洒なタッチに定評のあるローランド・ハナにはぴったりの曲想で、彼が心地よさ気にピアノを弾いてみせる。

5. マイ・ファニー・ヴァレンタイン（スティーヴ・キューン・トリオ）

膨大な数にのぼるスタンダード・チューンの中でも極めて高い人気を誇る1曲。数多くのヒット曲を生んだロレンツ・ハート（作詩）とリチャード・ロジャース（作曲）のゴールデン・コンビが1937年上演のミュージカル『ベイブズ・イン・アームズ』用に書き下ろしたナンバー。その後、1958年にフランク・シナトラが主演映画の『夜の豹』で歌い大ヒットを記録した。マイルス・デイヴィスのおはこでもあるこの曲を、ここではスティーヴ・キューンのトリオが穏やかな表情で淡々と演奏してみせる。

6. メランコリー・ベイビー（ロマンティック・ジャズ・トリオ）

スイング時代にヒットした乗りのいい曲。作詞をジョージ・ノートン、作曲をアーニー・バーネットが担当。ジョン・ディ・マルティーノ（ピアノ）とウゴンナ・オケゴ（ベース）とグラディ・テイト（ドラムス）によるロマンティック・ジャズ・トリオはピアノの低音部を強調することで、軽快なナンバーとして演奏されることの多いこの曲に重厚な響きをつけ加えてみせる。

7. ヌアージュ（ロブ・アフルベーク・トリオ）

ジプシー・ギタリストの最高峰ジャンゴ・ラインハルトが1940年に発表した代表曲。クラリネット奏者のユベール・ロスタンと組んだフランス・ホット・クラブ・ファイヴによって録音されたヴァージョンがオリジナル。ただしその後も作者自身によって何度も録音され、それらのいずれもが名演と呼ばれている。スイング・ジャズの様式で書かれた曲だが、原曲のよさを生かしつつ、ロブ・アフルベークのトリオはモダンな感性を存分に込めて彼らならではの演奏に仕上げてみせる。そのオリジナリティが聴きもの。

8. クライ・ミー・ア・リバー（ジョン・ヒックス・トリオ）

美人シンガーの代表格がジュリー・ロンドンだろうか。これはその彼女が1955年に吹き込んだ出世作だが、アーサー・ハミルトンが作詞・作曲したのはそれより2年前のこと。それをロンドンに歌わせたのが、プロデューサーでのちに夫となるボビー・トゥループだ（自身も「ルート66」のヒット曲を自作・自演している）。日ごろは強力なタッチを売りものにしているジョン・ヒックスだが、このトラックでは穏やかな奏法を示すところが意外な面白さに繋がった。

9. スター・クロスト・ラヴァーズ（クロード・ウィリアムソン・トリオ）

生涯で3000曲とも4000曲とも言われる膨大なオリジナルを書いたデューク・エリントンの隠れた名曲。エリントンと言えば、「キャラヴァン」、「A列車で行こう」など、ジャズ・ファンでなくとも耳に馴染みのある曲をいくつも発表している。また、彼が率いたオーケストラはジャズ界で最高の陣容と実力を誇っていた。ここでは名手のクロード・ウィリアムソンが優しさに溢れたタッチを存分に披露する。メロディのよさに加えて、歌心に溢れたプレイがいつまでも余韻を引く。

10. 恋におちた時（リチャード・ワイアンズ・トリオ）

多くのミュージシャンやシンガーが取り上げるこの曲は、1952年にエドワード・ヘイマン（作詞）とヴィクター・ヤング（作曲）が映画『零号作戦』の主題歌として書き下ろしたもの。人気に火がついたのは、1956年の映画『イスタンブール』でナット・キング・コールが歌ってから。端整なプレイに特徴のあるリチャード・ワイアンズらしく、ドリーミーなメロディを持つこの曲を弾いても、甘さに溺れず整然としたフレーズを積み重ねていくところが好ましい。

11. アンジェラ（ステファーノ・ボラーニ・トリオ）

「イパネマの娘」や「ワン・ノート・サンバ」など、ボサノヴァの創始者として黎明期に数々の名曲を残したアントニオ・カルロス・ジョビンのオリジナル。彼の代表曲に比べればそれほどポピュラーではないが、これも名曲と呼ぶに相応しい綺麗なメロディを持ち合わせている。情念を強調することで人気を獲得してきたイタリア出身のピアニスト、ステファーノ・ボラーニが、どちらかと言えばいつもの彼より控え目のプレイで演奏してみせる。テーマのあとに登場するベース・ソロも雰囲気があっていい。

12. イット・オンリー・ハーツ・ホエン・アイ・スマイル（ハロルド・メイバーン・トリオ）

ファンキーなタッチに魅力を発揮するハロルド・メイバーンは、実力に比して過小評価に甘んじてきた。1960年代に頭角を表して以来、通のファンからは支持されているものの、作品に恵まれないのが極めて残念だ。その彼の手による数少ないアルバムから、ここでは自作の曲が選ばれている。得意のゴスペル・ライクなメロディやフレーズをバラード奏法に包み込んだプレイはメイバーンならでは。

[(c)WINGS 05122346：小川隆夫/TAKAO OGAWA]